

ル・ポト政権の民主カンボジア、1979年には旧ソ連の共産主義を中心としたヘン・サムリン政権のカンボジア人民共和国、1980年代には、カンボジアは実質的に2つの政府が同時に存在しました。それは、1979年に樹立したカンボジア人民共和国と1982年に成立した民主カンボジア連合政府（ポル・ポト派、シハヌーク派、ソン・サン派）です。長い内戦が続いた後、1992年、国連カンボジア暫定統治機構（UNTAC）が設置され、カンボジア全土において自由で公正な総選挙へ向けての準備が始まり、1993年の総選挙を経てカンボジア王国憲法が制定され、新生カンボジア王国が誕生しました。



カンボジア

（以下、講演内容からの抜粋）

### 【講演】「カンボジア～今日に至るまで」

私は、とにかく読むことが好きで、どんな本であろうとそれが食品の入った袋でさえ、読んで捨てた。私を読書好きにした理由は、祖父や父親の影響だと思います。小学校2年生位から祖父と父親が、読むのをやると覚えた私に読書を勧め、本を買ってきては読み終わった後必ず内容の説明を求めました。

中学6年生（日本の中学1年生）頃になると私は何とかして世の中のために役に立つ人間になりたいと思いました。それには二つの理由があります。一つ目はとにかく本を読むことが大好きで、偉大な功績を残した多くの人の本を読んだ影響、二つ目は、よく父親が言っていた「私たち人間は体一つで生まれてきて、体一つで死んでいく。死んで行くときに何かを持っている人間はいない。だからお前は死んだあとにお前の墓に人が敬う代わりにツバを吐きかけるようなそんな人間になってはいけない。」と言う言葉でした。

私の最初の作品は14歳のときに書いた、『私の恋、どこに』です。この小説は私の叔父の実話に基づくものでしたが、カンボジアと言う国は、とても男女の仲や恋愛については厳しい国で、叔父に対して恋愛のことを聞いて書く事はできませんでした。そこで、その部分は他の作家がすでに書いている本を読み、それを想像して書き上げました。

この作品を国語の先生のところに持って行くと、先生が、「この調子で行けば将来作家になるのも夢ではない」と言ってくれました。今もその言葉を嬉しく思い出します。

ポル・ポト政権の時代になると国のあらゆる社会制度が打ち壊され、読む本もなく、学校に行くことも許されませんでした。すべてのカンボジア人は二つの階層に分けられました。

それは、旧人民と新人民でした。旧人民とは、ポル・ポトがゲリラや戦争をしているところから開放区に住んでいる人たちのことをさし、新人民とは、元々都会に住んでいた人たちのことをさしています。この新人民のことをポル・ポト政権側では、“反動的な垢のこび

り付いた者、革命の敵”と呼び、新人民には生活の自由は与えられませんでした。いつもオンカー（ポル・ポト政権執行部）から監視され、理由もなく迫害され続けました。

私も、私の家族も新人民の方に分類され、夜も昼も奴隷のように働かされました。マラリアや下痢、体の浮腫などの色んな病気になっても、一度もお腹いっぱい食べたためしはなく、少しの量の米で大きな鍋一杯のお粥を炊いて、それを20人ぐらいで食べたり、スープがあったとしても肉や魚が入ることは無く、水と葉っぱでなんの栄養もないものを飲んでいました。ほとんどのカンボジア人が餓えに苦しみ、ついには餓死した者さえいました。

その後、1984年のヘン・サムリン政権下では、本を書く自由はありませんでした。

また、政権の命令で強制結婚させられましたが、夫は家計を助けることはなく、賭け事ばかりしていました。おまけに私が本を書くことが大嫌いで、そのため夫との間でケンカが絶えませんでした。夫が書くことをどんなに妨害しても、それを嵐のようなものだと思うようにしました。しかし、人間の我慢や忍耐にも限界があります。ある時、私は我慢ができなくなって、離婚を決意しました。

それは簡単に決めたことではなく10年近く考えた上でのことでした。10年間離婚に踏み切れなかった理由には、離縁された女と呼ばれる恐れと3人の子どもを父親が居ない子にしてしまうこと、それと女一人で、子供達に良い将来を保証できるだろうか等悩みました。

それでも離婚を決意した一番の理由は、両親が何時もケンカしているということは、子供にとって決して良い環境だとは思えなかったし、父親がいない家庭の方が良いと考えたからです。夫のために費やす時間がたりなかったことなど私にも非があることは認めます。しかし書くことを捨て、暮らしを変えることはできませんでした。勿論、女手一つで公務員として働きながら子ども3人を育てることは容易なことではありませんでしたし、本を書くことで収入を得る望みがないことも分かっていました。でも、やめる事はできませんでした。今でも書き続け、公務員として働いています。

私は、作家として生きる他に何も望むことはありません。今では、小説を書くことを誰かに邪魔されることも、名前や顔を隠す必要もありません。私が、歩いてきた道を振り返るとき父が残した言葉に近づいて来ているのではないかと思います。ただ一つ残念なことは、父が今生きていて私の姿を見てくれないことです。 オー・クン（ありがとうーカンボジア語）

### 書籍購入 について

熊本国際交流会館2階交流ラウンジにおいて、バル・ヴァンナリー・レアク女史の作品を始め、現代アジアで活躍する女性作家の作品をご覧いただくことができます。また、書籍のご購入に関しましては、(株)段々社 TEL: 03-3999-6209 までお問い合わせくださいませ。